様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３８００２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６４３６

研究課題名（和文）体育授業の実践を担う教師のライフステージに応じた力量形成に関する実証的研究

研究課題名（英文）A study on the professional development in the life stage of the teacher for the prctice of physical education lessons

研究代表者
嘉数　健悟（KAKAZU, KENGO）

沖縄大学・人文学部・准教授

研究者番号：５０６１２７９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では4つの課題を取り上げ，研究を進めてきた。研究課題①では，国内における教師の「信念」に関する研究を「信念」が形成・変容する契機に着目し，5つの視点から整理した。研究課題②では，保健体育教師を目指す学生の教師観が教育実習を通してどのように変容するのかを検討し，既存の教師観の形成に指導教員が影響を与えることが示唆された。研究課題④では，シンガポールを調査し，教員養成の実態やその質保証の実態を把握した。しかし，研究課題③では，初任期から中堅期までの教師の力量形成について具体的に解明することができなかった。今後は本研究の課題を継続的に進めながら，教師の力量形成とその要因について検討していく。

研究成果の概要（英文）：In this study, we have been working on the following four research projects. the research project①, We addressed this project from the five viewpoints by focusing on the opportunities to develop and change the teacher's "belief". In the research project②, we also examined how the students who want to be health and physical education teachers changed their views of teacher through the teaching practice. Our results suggest that a teacher's adviser has an influence on the development of the existing view of teacher. In the research project④, we learned the actual situation of teacher training and the working of quality assurance of teacher through the teaching practice by investigating in Singapore.
However, we were unable to specifically identify the actual situation and problems during the development process in the teacher's life-stage in the research project③. In the future, we are going to continue our research to study the development process of teacher and its factors.

研究分野：体育科教育，教師教育

キーワード：教師志望学生　体育授業観　初任期　シンガポール

１．研究開始当初の背景

わが国では，1980 年代以降，「従来の一般的概念であった教員養成（teacher training）という観点にかわって，養成・採用・研修の連続性を意識した教師教育（teacher education）という観点」(山崎，2002）が強調されるようになっている。また，教師の成長を生涯的なものと捉え，その成長を支援するという観点から，初任期，中堅期など，教師のライフステージに応じた研修の在り方についても議論されている（『中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会教員の養成・採用・研修の改善に関するワーキンググループ』)。このことは，教師のライフステージに応じてどのように力量の形成を図り，それをどのように実現していくのかという問題と関わっている。とりわけ，初任期や中堅期の段階は，教師としての生涯的な成長の質を左右する重要なステージであることも指摘されており（山崎，2011)，体育教育の実践を担う教師の力量の向上にとって重要な段階であると考えられる。

ところで，秋田（1992）は，国内外における教師教育研究の動向をレビューするなかで，教師の学習観や授業観は文化や社会にその多くを規定されているとの認識に基づき，日本の教師の認知過程を明らかにすることが必要であると指摘している。さらに，教科や教材内容に即した授業に関する教師の知識の内容や構造などが十分に解明されていない現状も指摘している。この視点に立てば，授業の構想と実践に関する教師の知識，認識，信念，思考に焦点を当てた研究は，教師の力量形成に関する研究として極めて重要な位置を占めていると言えるだろう。

一方，国外に目を向けてみると，体育の教師志望学生や現職教師の知識，認識，信念に焦点を当てた研究がアメリカやイギリス，シンガポールなどで注目されており（例えば，Graber，1995；Tsangaridou，2008)，教員養成カリキュラムや教員研修の経験などと関連付けた縦断的，追跡的研究も行われている。

以上を踏まえると，教員養成段階で学ぶ学生を含め，教師のライフステージの初任期から中堅期までの彼らの力量形成の実態と課題を実証的に解明する研究が不可欠であると思われる。しかし，わが国では，教員養成と現職教師を対象とした研修との関連性や連続性に留意し，教師の力量形成とその要因について検討した研究は散見できない。

２．研究の目的

本研究では，教員養成段階も含めた教師のライフステージにおける教師の力量形成の実態と課題について，体育授業に関する彼らの知識，認識，及び信念に焦点をあてて実証的に解明し，教員養成カリキュラムや現職教育の研修などが，彼らの力量形成に与える影響について考察することを目的とした。さらに，体育授業に関する教師の力量を向上させていくための教師教育の方策について示唆を得ることも目的とした。

なお，本研究を進めるにあたって，以下の 4 つの研究課題を設定し研究を進めた。

研究課題①：国内外の文献や研究資料などをもとに，体育授業の構想や実践に関わる教師の知識，思考，信念，授業観，および教師の専門性向上などに関与する研究の成果や課題を導出する。

研究課題②：教員養成を卒業した初任期の体育教師を対象として，体育授業の構想や実践に関わる教師の知識，信念，授業観などについて授業の参与観察やインタビュー調査などを実施する。

研究課題③：初任期から中堅期の体育教師を対象として，体育授業に関する研修の内容や方法，および体育授業の構想や実践に関わる教師の知識，信念，授業観などについて，質問紙調査や授業の参与観察，ライフヒストリーインタビューを実施し，多角的に検証する。

研究課題④：研究課題①を踏まえ，国外において取り組まれている体育教師の専門性向上の方策について，その実態を現地で調査し，その特徴や課題を把握する。そして，研究課題②と③で得られた事例から，日本の教員養成及び現職教師教育における専門性向上の取り組みの実態と比較する。

３．研究の方法

本研究では，調査資料の多くが質的なデータであった。とりわけ，研究課題②と③における参与観察やインタビューなどによる記録は，ビデオカメラやボイスレコーダーによって記録し，それらのデータを文字化，コード化するなどによって分析を行った。さらに，データの信頼性，妥当性を検証するためのメンバーチェックやトライアンギュレーションなどを実施した（西條，2007)。

４．研究成果

研究課題①では，国内外の文献や研究資料などをもとに，体育授業の構想や実践に関わる教師の「信念」に関する研究成果を整理した。具体的には，以下の通りである。

教師の「信念」は，教師の個人的経験によって形成されるものと考えられており，教師のもつ「信念」の個人差を明らかにする研究も行われてきている。その背景には，「教師の個人差に着目し，なぜある教師が特定の教授方略を頻繁に使用するのか，あるいは使用しないのかを説明するのに，信念の研究は有効である」（秋田，1992）という考えがあるからと言えよう。また，

Kagan（1992）が教師としての成長に「信念の変化（Changes in belief）」を挙げており，個々の教師が 30 年以上の教職経験の中で，何を学び，何を身に付け，どのように成長しているのかを「信念」という側面から知ることも重要になると考えられている。そこで，黒羽（2003）に依拠し，教師の「信念」形成の契機がどこにあり，そこにはどのようなことが起きているのかを 5 つの視点から整理した。

(1)家庭から無意識に感化される幼少期の潜在的影響力

黒羽（2003）は，親に学校に連れられて遊んだ経験や教師としての親の姿から，学校を肯定的に捉え，教職志望の意識を強く形成する要因になっていると指摘している。また，朝倉・清水（2010）の研究では，ある体育教師が「遊び－楽しさ」という中心的「信念」を保持しているのは，幼児期に父親の影響で始めたサッカーの経験や休み時間，放課後に居残りで遊んだことによる経験が根底にあると報告されている。そして，体育の授業や部活動においても自らの実践が理想に近づいているのかという考えから問題を設定し，その実現を目指していると述べている。

このことから，幼児期における遊びを通したスポーツや運動の経験が「信念」を形成する素地となって，それが教師になってからも体育の授業観や指導観などに影響を与えていることを示していると考えられた。

(2)自己形成期における「意味ある他者」である教師との出会い

嘉数（2010）では，教師志望学生の教師観を検討する中で，ある学生が高校時代に部活動の指導者がいなくて，キャプテンをしていたことで苦労したことから,「自分が教師になって部活を教えてあげたい」と思ったことが保健体育教師を目指すようになったことが明らかになっています。その根底には，中学や高校の恩師が中心となって行事を運営しているのを見ることで，保健体育教に憧れるようになり教職に対する意欲が高まったと報告されている。また，木原・村上（2013）では，ある教師が教師を目指したのは陸上部の監督との出会いであり，その監督の指導方針から「教える」ことへの魅力を感じたことがきっかけとなったと述べられている。そして，自身の競技スポーツの経験から体育についての関心や考えを継続的に保持していたことも明らかにされている。

このことを踏まえると,小学校や中学校,高等学校時代という自己形成の段階における部活動やスポーツなどを通した「意味ある他者（教師）」との出会いが教師を目指すきっかけとなり,「信念」を形成する契機になっていると考えられる。

(3)優れた同僚教師との出会い

木原（2004）は，授業力量が若手教師（初任から 5 年未満），中堅教師（5 年以上 15 年未満），ベテラン教師（15 年以上）と段階的に発達すると述べている。また，吉崎（1997）は，初任期の最初の 1 年間は教職生活において最も成長する段階であることも指摘しており，その時期を「サバイバル期」と呼んでいる。こうした状況において，教師の「信念」は希薄な段階で変化する（Pajares, 1992）ことが指摘されている。

つまり，教職歴の浅い若手教師の段階では，自分の教師観や授業観などの「信念」を揺さぶるような経験が多く起きることが想定され，その後の成長に大きく影響を与えると考えられる。初任期の若手教師は，熟練した同僚の援助があれば「授業力量」の向上につながることが明らかにされている（木原，2007）ことも踏まえると，「優れた同僚教師」との出会いが「信念」の形成にも関係していると言えよう。

初任期の若手教師は，授業や研修，校務分掌など教職に就いて初めて経験することが多くあると考えられる。その時に，経験のある同僚教師とどのように関わり，指導や支援を受けるのかも「信念」を形成していく上で重要な要因になると考えられる。

(4)日々の授業実践を通した児童, 生徒との出会い

授業は，教師の中心的な業務の 1 つである。その授業を通して，教師は子どもたちの学習状況を知ることはもちろんのこと，一人一人の様子やその変化を見取っている。黒羽（2003）も，授業を通した子どもの学習状況から自身の未熟さを肯定的に受け止め，自身の実践を問い直すことで「信念」の形成の契機になると述べている。

例えば，木原・村上（2013）は，初任 1 年目の失敗が A 教師の体育授業観の転換する契機になったことを明らかにしている。その契機とは,「教師がよいと思って設定した目標に即して技能を練習させ技能を獲得させたとしても，子どもがその運動の価値を理解できないのであれば，運動に親しむという生涯体育を実現することができないことに気付いた」ことであり，教師と子どもの認識にズレがあったということが考えられる。その結果，A 教師は「体育授業の運動技能中心の目標観を見直すと同時に生涯にわたって運動を楽しもうとする子どもを育てる体育授業を模索」するようになったと述べている。朝倉・清水（2010）では，「生徒－コミュニケーション」という信念を保持している教師が自ら生徒のコミュニケーション能力の低さを直接目の当たりにすることで「信念」の強化が促進されたと指摘している。

このことから，教師の「信念」は，授業における子どもたちの反応や声，様子など

を教師が肯定的に受け止め，どのように問い直すのかによって，その変容にとって大きく影響を与えると考えられる。

(5)学校外部の優れた人物との出会い

木原・村上（2013）は教育センターへの長期派遣研修において指導主事から指導を受けることによって自身の体育授業に対する考え方に確信を持ち，授業観の確立をもたらしたと述べている。わが国では，フォーマル・インフォーマルな形で教師仲間が集まって授業研究を行うことが少なくない。木原・村上（2013）は「子どもの学習成果から授業の計画・指導を振り返る授業研究が体育授業観の変容や確立に果たす役割は大きい」と指摘していることからも，互いを励まし，刺激しあえるような「学校外部の優れた人物」との出会いは「信念」の形成にとって重要と言えよう。

以上を踏まえ，教師の「信念」は，教員養成以前の段階から保持され，教員養成で形成，変容し，入職してからも変容していくものと考えると，教師自身がいかに自己の教育実践を振り返り，いかに相対化するのかが教師が成長する一つの契機になるのではないかということを指摘した。

次に，研究課題②として，教育実習における保健体育科実習生の教師観が教育実習を経験することで，それらがどのように変容するのかを検討した。

対象者は，A 大学附属中学校（以下，実習校と略す）において教育実習を行った保健体育専修所属の 3 年生 5 名（男子）を対象とした。また, A 大学の保健体育専修は，教員養成課程であり卒業要件は，小 1 種と中 2 種か小 2 種と中 1 種となっている。実習生は全員が小・中・高等学校教諭の 1 種免許状取得を目指していた。さらに，A 大学近くの小学校や中学校に「体育ボランティア」として参加するなど活動的で，教職に対する意欲が高い学生が多い。そのため，対象者は目的的サンプリング（メリアム，2004）によって選定した。

データは，(1）教育実習前後において先行研究を参考（Doolittle et al。,1993；Tsangaridou , 2008；山崎，2007）に作成した記述式の質問紙，(2）教育実習後に実施した半構造化されたインタビュー（メリアム，2004)，(3）教育実習日誌の 3 つであった。

以上より，データの分析を行った結果，教育実習前後における教育実習生の教師観は表 1 と表 2 のようになった。

具体的には，以下の通りである。

①教育実習前後における 5 人の実習生の教師観は，教育実習前と比べると大カテゴリーの構造が変化するが，その下位カテゴリーの構造に変容はなかった。つまり，教育実習での経験は，既存の教師観を再認識する契機になると考えられた。

表 1　教育実習前における分類した教師観のカテゴリーとその記述例

カテゴリー	記述例
保健体育教師の学校における役割	
生徒指導	保健体育教師はいつも生徒指導を任され、威厳を保つ存在だと思います
部活の顧問	また部活動の顧問に必ずつくイメージがあります
同僚性	
同僚からみた保健体育教師	学校全体がよくなることを考え、教頭、校長にも一目置かれるの体育教師です
学校の中心	生徒や、他の教師方。時には学校全体をまとめることもあり。とても頼もしく感じます。
リーダー性	保健体育教師とは、つねに生徒指導や学校行事などの先頭に立ち、リーダーとして生徒、教員を引っ張っていける存在だと思います
保健体育教師の人間性	
芸人	保健体育教師の周りでは、何かと笑いが起きるようなイメージがあります
メンタル	決してあきらめない、決して逃げない、最後までやりぬく精神力を持っているのが保健体育教師であると思います
保健体育教師の専門性	
教師の運動技能	保健体育の教師は身体の動かし方が全て生徒の手本になるような技術の高い教師が求められていると思います
運動に関する知識	体育の専門性とはいかに生徒たちの目から運動を捉えることができるかということだと思います
私はこうなりたい	私も保健体育教師を目指している一人として、今のうちからリーダーとしての意識を持って、自主的にみんなをまとめるようにしていきたいです

表 2　教育実習後における分類した教師観のカテゴリーとその記述例

カテゴリー	記述例
理想的な保健体育教師	
忍耐と情熱	その分苦労もすると思うのですが、それを苦労と思わない教師になりたいです
教師の運動技能	保健体育教師は、運動においてきまざまな知識や技能を修得している身体的機能が高い教師です
叱るということの優しさ	生徒の成長を一番に考え、今は理解してもらえない指導でも生徒のことを思って指導できる教師が保健体育教師だと思います
同僚性	
頼りがいのあるスーパーマン	保健体育の教師とは、生徒にも同僚の教師にも頼られる存在であるべきだと考えま
リーダー性	私の考える保健体育教師とは、「リーダー」であるということです
教育実習での実感	
不甲斐ない自分	疲れているときの陸上練習を少し怠けてしまったり、教材研究で少し手を抜いてしまったりしてしまいました
現場は忙しい	現場に出て感じたことは保健体育教師はとても忙しいということでした
リーダーとしての実感	実習生の中でも保健体育の実習生がいろいろ仕切って行動していたように感じたの
期待に応えたい	他の教科の実習生から見ても、保健体育という頼りがいがあり、また保健体育の教師・実習生としても頼られたいという気持ちがあるように感じました
他教科との比較	体育の授業では生徒を教室外で指導するので、安全面には最新の注意を払う

②教育実習前後における B 君の教師観は，教育実習を通して指導教員である S 先生と共に授業以外の教師の仕事を経験することで，彼がもともと持っている既存の教師観を自覚する契機になったと思われた。つまり，B 君の教師観は教育実習を通じて変容しないが，既存の教師観の形成に S 先生の教師としての考えが影響を与えたと考えられた。

しかしながら，本研究は事例的研究であり，本研究の結果がその他の場合にも適応できるかは不明である。そのためにも，今後，様々な角度から教師の信念，とりわけ教師観についての研究を蓄積していく必要があることが課題として挙げられた。

次に，研究課題③では初任期の保健体育教師が保健授業の実践に関してどのような課題を抱えているのかを明らかにした。対象者は，公立高等学校に勤務する初任の男性教諭であった。データは，(1）質問紙調査（記述式）と（2）インタビュー調査によって収集した。

以上のデータの分析を行った結果，初任保健体育教師は.「保健の授業をやる意味」，「保健の授業の教材研究」，「保健の授業の方法」についての課題を抱えていることが明らかになった。その背景には，保健学習に関して，教員養成での理論的，実践的な学習が十分に行われていないこと，初任研

における校内外の研修等が充実していない可能性があることが示唆された。

最後に，研究課題④の一環として，シンガポールにおける調査も実施した。シンガポールは，NIE（National Institute of Education）という教員養成機関においてのみ教員養成を行っている。その NIE は，Ministry of Education（MOE）の直轄の組織となっているが，Nanyang Technological University（NTU）の一組織ともなっており，学士（Bachelor degree）を出すことで教員資格の取得が可能になっている。そして，その NIE の体育教員養成として，PESS（Physical Education & Sports Science）がある。以下が調査の概略である。

NIE における体育の教員養成は 3 つのコースで行っており，「PGDE（2 年）」，「undergraduate programmes（4 年）」，「Diploma（2 年）」となっている。なお，Diploma は小学校の教員にしかなれない。また，PESS には 8 か国 33 名のスタッフがおり，教員養成に関わっており，学生に体育の専門的な知識や技能を習得させることを目指している。教育実習などの実践に関することは Practicum 専用の Office が指導しているが，教育実習において体育の学生が行う授業の評価は，PESS の教員も行うことが義務付けられている（日本で言う研究授業を参観し，評価まで行う）。

NIE の教育実習は，MOE と学校，NIE が連携して実施しており，系統的な学びにつながるように実施されている。主な教育実習の内容は以下の通りである。

School Experience（SE）	小学校に *1* 週間，中学校に *1* 週間の観察，計 *2* 週間の実習。
School Assistanceship（SA）	教師の補助が中心，*T2* のようなもの。*5* 週間の実習。
Teaching Practice 1（TP1）	*1*，*2* 週目は観察を行い，*3*～*5* 週目は授業をする。計 *5* 週間の実習。
Teaching Practice 2（TP2）	すべてを一人で行う。*10* 週間の実習。

・SE と SA，TP1 と TP2 は，同じ学校で実習を行い，学校の雰囲気やその違いなどについて感じてもらっている。
・SE や SA は，「良い」か「悪い」の 2 段階の評価となっており，大学での振り返りを行うことはせずに，教師の適正のみを評価している。
・TP1 や TP2 は，4 段階（日本で言う，優・良・可・不可）で評価を行い，TP2 において不可となったものは，再トライし，それでも不可の場合は免許が授与されない。
・TP1 は，実習校で最低 4 回の授業評価が行われている。また NIE の先生は，1 回の観察と評価が義務付けられている（各教科）。
・TP2 は，実習校で最低 6 回の授業評価が行われている。また NIE の先生は，2 回の観察と評価が義務付けられている（各教科）。

以上のように，NIE では複数の教育実習と評価機会を設けることによって，教師としての質保証を目指していることが示唆された。

このように，本研究では 4 つの課題を取り上げ，研究を進めてきた。特に，研究課題①に関しては，国内における教師の「信念」に関する研究を「信念」が形成・変容する契機に着目して整理することができた。また，教師を目指す学生の教師観が教育実習を通してどのように変容するのかも検討できた。しかしながら，教師のライフステージの初任期から中堅期までの彼らの力量形成の実態と課題を具体的に解明することができなかった。具体的には，初任期に関しては，児湯員養成の段階からのつながりの中で研究成果の一端を示すことができたが，中堅期については十分なデータの収集をするには至らなかった。今後は，本研究の課題を継続的に進めながら，教師の力量形成とその要因について検討していきたい。

＜主な引用参考文献＞

秋田喜代美（1992）教師の知識と思考に関する研究動向．東京大学教育学部紀要 32：221-232

朝倉雅史・清水紀宏（2010）体育教師の信念に関するエスノグラフィー研究．体育・スポーツ経営学研究 24：25-46

Calderhead, J. (1996) Teachers: beliefs and knowledge, in D.C. Berliner & R.C.Calfee(Eds) Handbook of educational psychology (New York, Macmillan) ：pp709-725

Kagan, D.M. (1992) Professional Growth Among Preservice and Beginning Teachers. Review of Educational Research62(2):129-169

木原成一郎・村上彰彦（2013）体育授業の力量形成に関する一考察－小学校教師 A のライフヒストリーにおける体育授業観を中心に－．学校教育実践学研究 19：247-258

木原俊行（2004）授業研究と教師の成長．日本文教出版：東京

栗塚祐二（2013）若手教師奮闘記－初任期の困難と克服を振り返る－．体育科教育 61（6）：20-23

黒羽正見（2003）教育課程経営の継続的更新における教師の信念の形成要因に関する　事例研究：エスノグラフィーに基づくライフヒストリー分析を中心に．富山

大学教育学部紀要 57：141-160
Meriam：堀薫夫・久保真人・成島美弥訳（2004）質的調査法入門 教育における調査法とケーススタディ．ミネルヴァ書房：東京
Pajares,M.F.(1992) Teachers' Beliefs and educational research: Cleaning up a messy construct. Review of Educational Research 62(3)：307-332
菅裕（2000）音楽教師の信念に関する研究－福島大学附属小学校における参与観察とインタビューをとおして－．日本教科教育学会誌 22（4）：65-74
佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美（1991）教師の実践的思考様式に関する研究（1）－熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に－．東京大学教育学部紀要 30：177-198
Tsangaridou, N. (2006) Teachers' beliefs, in ： D.Kirk, D. Macdonald & M. O' sullivan (Eds) Handbook of research in physical education (London) ： pp486-501
吉崎静夫（1997）デザイナーとしての教師，アクターとしての教師．金子書房：東京

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

嘉数健悟・上地幸市（2017）教師の資質能力の形成を目指した大学と関係機関との連携のあり方について－A 市教育委員会の取り組み－．沖縄大学人文学部紀要 19：119-124（査読無）
小林稔・藤田勉・嘉数健悟ほか（2017）体育における学習意欲が「思考力・判断力」に及ぼす影響－沖縄県の中学生を対象とした調査から－．琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻紀要 1：17-23（査読無）
嘉数健悟・上地幸市（2017）教育実習における教師志望学生の教師観の変容に関する事例研究．教職実践研究 7：21-30（査読有）
小林稔・金星・藤田勉・與儀幸朝・嘉数健悟ほか（2016）中学校体育授業における思考力・判断力の自己評価尺度に関する信頼性と妥当性の検討．京都教育大学紀要 128：141-153（査読無）
嘉数健悟・岩田昌太郎・木原成一郎・徳永隆治・林修・大後戸一樹・久保研二・村井　潤・加登本仁（2015）中学校保健体育教師の体育授業の力量形成に関する研究－教職歴の差異による悩み事に着目して－．沖縄大学人文学部紀要 17：39-48（査読無）

〔学会発表〕（計 4 件）

嘉数健悟（2017）初任保健体育教師が直面する保健授業の実践について抱える課題－一学期の課題に着目して－．日本保健科教育学会第 2 回研究大会：34（ポスター発表）
嘉数健悟・岩田昌太郎・齊藤一彦ほか（2016）シンガポールにおける教師の力量形成に資する授業研究の取組み －インタビュー調査を手がかりとして－．第 42 回日本教科教育学会全国大会論文集：198-199（ポスター発表）
嘉数健悟（2016）シンガポールにおける体育教員養成カリキュラムの調査－インタビュー調査を中心として－．第 36 回日本スポーツ教育学会大会号：97（ポスター発表）

〔図書〕（計 3 件）

嘉数健悟（2016）「第Ⅰ章第 4 節　教員志望学生から初任期教員までの力量形成」，「第Ⅱ章第 5 節　教員採用試験における具体的な対応策」．桶谷守・小林稔・橋本京子・西井薫編．教育実習から教員採用・初任期までに知っておくべきこと－「骨太の教員」をめざすために－．教育出版：pp.11-12，pp.47-49，東京
嘉数健悟（2016）「2.海を活かした教育の新たな視点」，「4.水辺での安全対策」清水洋一・遠藤洋志・江藤真生子編．教師のための海を活かした教育アイディア集－教育の意義から各種海洋教育実践事例まで－．協同出版：pp.15-17，pp.35-41，東京
嘉数健悟（2015）「第 1 章 1.2　教師の成長に伴う『信念』の形成」，「第 3 章 3.2　法定研　　修で指導力の基礎を築く」木原成一郎・徳永隆治・村井潤編．体育授業を学び続ける－教師の成長物語－．創文企画：pp17-27，pp93-99，東京

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）
○取得状況（計 0 件）

６．研究組織

(1)研究代表者
嘉数健悟（KAKAZU,Kengo）
沖縄大学・人文学部・准教授
研究者番号：50612793

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
岩田昌太郎（IWATA,Shotaro）
広島大学大学院・教育学研究科・准教授